

〔巻頭言〕

看護実践研究における「臨床の知」を有形化していく試み

紀要編集委員長 石川 かおり

紀要編集委員会が新体制となって2年が経過し、この間、本学の教育・研究活動に即した紀要のあり方や査読・編集の方法について検討を重ねてきた。そのなかで、大きな課題となっていることの一つは、本学がこれまで共同研究事業や大学院教育を通して推進してきた看護実践研究の成果を、論文という形で明示し、かつその学的な水準をクリアすることである。

実践研究で取り扱われるような、対象、場所、時間などが限定された事例的な研究は、「科学的ではない」「一般化できない」と批判され、研究としての価値は低く見積もられがちで学術雑誌での掲載はそれほど多くはない。

一方、ランダム化比較試験 (RCT) のメタアナリシスはエビデンスレベルが最高位とされているが、100件中23件の結果が2年以内に否定されたという報告¹⁾もあり、エビデンスの普遍性には疑義の余地があるようだ。また、普遍性、論理性、客観性を原理とする「科学の知」が、その原理を重視するあまりに対象から距離を置き、表面的な分析にとどまる危険があるという批判から、固有世界、事物の多義性、身体をそなえた行為を主とする「臨床の知」²⁾としてのアプローチにも光があてられるようになってきた。そして、「科学の知」と「臨床の知」は相反関係ではなく、例えば根拠に基づく医療 (EBM) の実践は「科学の知 (エビデンス)」と「臨床の知」を統合した上で患者に適応できる³⁾とされている。

このように、実践研究における「臨床の知」の意義や重要性は明白である。しかし、その「臨床の知」に公共性をもたらす論文という形あるものにするための方法は未確立で、私達が試行錯誤しながら進めていくしかない。

看護や教育といった実践が伴う領域では、普遍的な問題とともに文化や価値観、地域性や関係性など多様で多義的な側面を内包した文脈依存的なローカルな問題を扱う。そのため、研究においては、普遍性だけではなく個別性、再現性だけではなく一回性、客観性だけではなく主観性といった観点から現象に迫り、普遍と個別、再現

性と一回性、客観と主観といった両立し得ない対極を統合できるような方法論が必要⁴⁾となる。ローカルな現場での課題に由来する研究は、対象、場所、時間が限定されていても、その現場で生起している問題の本質を極めて現実的に捉えることが可能になるし、その現場で直接的に活用できるものである。そこに科学性や一般化の可能性を担保できれば、研究の有用性も承認されうと思う。そのためには、提示したい知見が得られるまでの一連の研究プロセスとその論理的根拠を開示することが重要だろう。それは実践の全てを詳らかに記述するという意味ではない。おそらく研究者自身も実践の当事者として深く入り込んでいる現象を、クールに客観的に見つめる眼差しを持って、論理的かつ厳密に記述するということである。また、現場固有の言語や当たり前とされているローカルなルールを、誰もが了解可能な言語で記述することも大切だろう。言うは易しで、これらを実際に行うのは難しい作業となるが、知見の有用性、限界、一般化への可能性等を判断する上で重要な、第三者による批判的吟味の機会と再現可能性を確認する方法を担保する一助になると考えるが、いかがだろうか。

来年度からは投稿資格に大学院修了者も加わる。修士論文で取り組んだ看護実践研究で発見した「臨床の知」を論文として有形化していくチャレンジの場として、教員とともに紀要を活用していただければ幸いである。

文献

- 1) Shojania, KG., Sampson, M., Ansari, MT., et al: How quickly do systematic reviews go out of date? A survival analysis, *Annals of Clinical Medicine*, 147(4); 224-233, 2007.
- 2) 中村雄二郎: 臨床の知とは何か, 岩波新書, 1992.
- 3) Sackett, DL., Straus, SE., Richardson, WS., et al: Evidence-Based Medicine: EBMの実践と教育. エルゼビア・ジャパン, 2003.
- 4) 岩崎弥生: 精神障害をもつ人の体験世界の理解に基づく看護研究方法の模索, *看護研究*, 44(5); 474-481, 2011.